

学位論文題名

陳啓源の詩經學

— 『毛詩稽古編』 研究 —

学位論文内容の要旨

本学位論文は、明末清初の学者、陳啓源の主著『毛詩稽古編』をとりあげ、同書に見える詩經学の特色とその後世に及ぼした影響について、解明を試みたものである。

序論では、陳啓源と『毛詩稽古編』に関する基礎的考察を行う。陳啓源の伝記資料は乏しく、また『毛詩稽古編』の成立背景も複雑であるが、限られた資料に基きながらも、陳啓源が『詩經』研究に専念した動機や、康熙26年(1687)に『毛詩稽古編』が完成するに至るまでの経緯を具体的に明らかにする。加えて、先行研究の分析と現在に至るまでの研究動向を整理する。

第一章では、陳啓源の『詩經』解釈の方法をとりあげる。陳啓源は、古来の經典や注釈に依拠しながら考証を行い、とりわけ諸注釈の取捨選択の基準として『爾雅』『説文解字』等の字書を積極的に活用したが、その独自の手法が清朝乾嘉期の学風と共通することから推して、陳啓源は清朝考証学の先駆的な役割を果たしたことを指摘する。

第二章では、陳啓源の『詩經』解釈においては、詩序を重要視する傾向が認められるが、そうした詩序論が展開された要因と特色について考察する。陳啓源は、清初に至るまで周知の学説と見なされてきた「衛宏作成詩序」説について、自ら考証の末、それを否定するとともに、詩序は古く国史の官に由来するもので、『詩經』解釈における必須の文として尊重したことを明らかにする。

第三章では、第二章で考察された陳啓源の詩序論が、清代学术界で受容されていった過程について考究する。その結果、明末清初の学者、朱鶴齡と陳啓源が先駆的な役割を果たし、以後、惠棟・錢大昕・翁方綱・胡承珙等がそれを継続することによって、「衛宏作成詩序」説が否定されたという新たな知見を提示する。

第四章では、『毛詩稽古編』の成立過程とその流布について検討した上で、同書の諸版本に関する系統立てを提示する。特に注目すべきは、陳啓源が三度の改稿を経て『毛詩稽古編』を完成させたといわれる中で、初稿は康熙十八年(1679)ごろ成り、続稿は康熙二十二年(1683)から康熙二十三年(1684)の間に脱稿し、完成稿は康熙二十六年(1687)に擱筆されたことを実証的に明らかにした点にある。

第五章では、陳啓源『毛詩稽古編』と朱鶴齡『詩經通義』をとりあげ、両者の関係とそれぞれの書物の特質について考究する。その上で、その両者は、学術的に密接な協力関係

にあったこと、陳啓源が『詩經通義』の成立に深く関与し、朱鶴齡が陳啓源の所論を『詩經通義』にとり入れたこと、さらに両者が共通する学問上の問題意識を有していたことを証明する。

第六章では、『毛詩稽古編』に見える陳啓源のいわゆる賦比興論について考察を行う。その結果、陳啓源は、賦・比・興のうち、興体を重視し、興体の用法として、間接的比喻としての暗喩法の他に、事象の性質的近似を用いた類推法の存在を主張したことを確認する。あわせて、陳啓源は、当時定論とされた朱熹の学説に対して、種々の問題点があることを指摘し、賦・比・興には、詩において導出すべき意義が存在すると考えたことを明らかにする。

以上、多方面からの考察を踏まえて、陳啓源の詩經学には、詩序に対する篤信という特徴が顕著に認められ、またその考証学的手法に基づく学説は、清初以降の諸学者に連綿と継承されるとともに、清朝における『毛詩』学の流行を引起す契機となったと結論づける。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 弼 和 順
副 査 教 授 佐 藤 鍊 太郎
副 査 教 授 三 木 聰

学 位 論 文 題 名

陳啓源の詩經學

— 『毛詩稽古編』 研究 —

本学位論文の審査の方法および経過の概要は、次の通りである。平成 19 年 12 月 14 日開催の大学院文学研究科教授会において、上記の審査担当者が決定されたのを受けて、合計 5 回の審査委員会を開催した。審査委員会では、査読用申請論文の配布、日程の調整、申請論文の内容の検討、質問事項の整理などを行った上で、平成 20 年 1 月 25 日に口述試験を実施した。その後、口述試験の結果を踏まえて、学位授与の判定を行うとともに、審査結果報告書を検討し、同報告書を作成した。以上に基いて、平成 20 年 2 月 1 日開催の同教授会において、主査より審査報告を行った。

本学位論文の研究成果としては、以下の諸点が挙げられる。すなわち、陳啓源の『毛詩稽古編』に関する研究は、従来、ほとんど行われていなかったが、そうした未開拓の研究分野に対して、本論文所収の各論考は、はじめて本格的な考究を加えた意欲作といえる。また、本論文の第一章は『中国哲学』第 29 号（2000 年）に、第二章は『日本中国学会報』第 57 集（2005 年）に、第三章・第四章は『詩經研究』第 30 号（2005 年）・第 31 号（2007 年）に、第六章は『中国哲学』第 35 号（2007 年）に掲載済みのものであり、加えて、第五章は、昨年、台湾で開催された国際シンポジウム（第 2 回「東アジアの經典解釈における言語分析」）における発表原稿に基くものである。以上、いずれの論考も、すでに国内外で一定の評価を得ていることはいうまでもない。とりわけ、第二章・第六章における陳啓源の詩序論および賦比興論は、陳啓源の詩經学の特質を解明するとともに、詩經学史上において、その位置づけを試みたものとして、高い評価を受けている。さらに、第三章・第五章は、陳啓源個人の研究にとどまらず、同時代の諸学者の詩經学との比較を通して明末清初における陳啓源の思想的意義を明らかにした点において、今後の清代思想史研究に大きな影響を与えることが予想される。なお、審査の過程では、各章の論考は一定の水準に到達しており、また首尾一貫した内容を有するが、本論文全体を通観したとき、その構成に一部不統一の点が見られるという指摘もなされた。しかし、これらの点は、決して本論文の研究成果を損なうものではなく、さらなる研究において十分解決される課題であると認

められる。本審査委員会は、以上の審査結果に基づき、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであるとの結論に達した。